

陳舜臣さんを語る会通信

No.151 Jan. 2026

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2026年1月20日

中国歴史小説、特に、その本線をなす『阿片戦争』…、に見る陳舜臣さんの小説作法



講談社文庫
新装版表紙

■このページ、傍線はすべて加筆。

《1『阿片戦争』主役は阿片戦争そのもの》
『阿片戦争』（一九七三 講談社文庫）、奈良本辰也氏の「解説」を抜粋引用します。

この三千余枚におよぶ大作にはじめて接したとき、私はある種のとまどいを感じた。それは、今日まで私が親しんできた歴史小説と、ひどく異質な味わいをもっていたのである。たとえば、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』、あるいは『国盗り物語』にしても、子母沢寛の『勝海舟』、野上弥生子の『秀吉と利休』にしても、すべて人間が主役となっていることである。作家たちは個人を思いきり個性的に描くことによって、かつて人間不在であった歴史に生き生きとした息吹を吹きこんだ。読者はそこに躍動する人間の行為によって、はじめて遠い時代を身近にひきよせることができたのである。

だが、陳氏の描く『阿片戦争』は、それとは趣を異にするように思えた。『阿片戦争』の主役は阿片戦争そのものののだ。この作品の場合、どの人物をとりあげてみても、この小説の主役とは云いがたいのだ。林則徐にして然り。作者が作中もっとも重要な役割をふりあてている連維材という人物も、時代を象徴する英雄としては描かれてないのである。

《2『青玉獅子香炉』、人物が背景の歴史記述に押しつぶされそう》

『青玉獅子香炉』、足立巻一氏の「解説」から引用します。

直木賞を受けた当時、選考委員のひとりの評言に「背景の歴史的出来事の記述が多すぎて、香炉をめぐる人物が押しつぶされそうになるのもきがりだった」とあったが…。

《3 実録風に描かれた『江は流れず』》

『阿片戦争』には連維材、『太平天国』には連理文、『山河在り』には温世航というように、いずれも、架空の人物、連家、温家の人たちが登場して重要な役柄を演じるのですが、『江は流れず』には登場しません。このことも関係しますが、『江は流れず』はフィクションが少ないように思えます。これについて、陳舜臣さんご自身、集英社『陳舜臣中国ライブラリー6』「自作の周辺」で次のように語っています。

（『江は流れず』は）たしかに実録風ではありますね。日清戦争に関しての資料が大量にありますね。そっちに引っ張られてしまった感じがあるんです。

上述《1》《2》は、陳舜臣さんの中国歴史小説、特に、その本線をなす、『阿片戦争』『太平天国』『江は流れず』『山河在り』のすべてにあてはまります。《3》もそんなに違いません。これらの作品を読むとき、ストーリーへの没入を、詳細多量な時代背景描写によって、度々、断ち切られることは確かです。

《4 陳舜臣作品における中国歴史小説の本線》

陳さんは次のようにおっしゃっています。

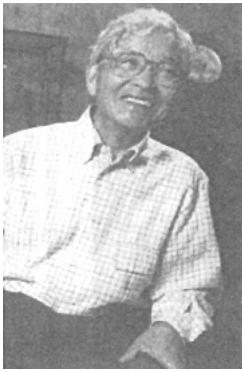
私は小説の形式で中国の近代史を考えながら書きたいという野心があった。近代の開始となった阿片戦争は、とうぜんスターラインとして濃く引いておかねばならなかった。（中略）その後、私は太平天国、日清戦争、と時代をくだって近代を書きつづけ、また近代にいたる歴史考察のため時代をさかのぼって、「中国の歴史」を書くことになった。（1990.5.13付朝日新聞）

補足 ■『史記』の作者司馬遷は、自分の生きた時代、すなわち漢の武帝の時代を書きたいために、さかのぼって、五帝紀から筆をおこしたといわれています。（中略）私が『中国の歴史』を書くことを思い立ったのはそのためでした。アヘン戦争から太平天国と、時代をくだって書き進めていたのが、こんどはさかのぼってみなければならないとおもったのです。（講談社文庫『中国の歴史七』「文庫版完結にあたってのあとがき」）
ということで行かれたのが『中国の歴史』『中国の歴史 近代篇』であるが、本当に描きたいのは『阿片戦争』以降の歴史であった。

平凡社版
第15巻表紙
挿画：
平山郁夫



中国歴史小説、特に、その本線をなす『阿片戦争』…、に見る陳舜臣さんの小説作法(続)



右掲新聞記事より

以下は二年二カ月に及ぶ連載を振り返った陳さんの文章です。一九九七年六月三日付朝日新聞「書きたかったテーマ 半身麻痺と闘い完走」から抜粋引用。傍線は加筆。

多くの人にはげまれ、けんめい書いてきた。スピードが遅いこと



「チングス・ハーンの一族①」(朝日新聞社) 表紙

読者に忍耐を強いることが多かったのは、作者としてお詫びしたい

は、ちょうど思考の流れと合って、よかったのではないかと思う。長いあいだあたためて来たテーマなので、速く書きすぎると、もっとひとりよがりになったかもしれない。脳内出血でたおれたことは、今では天の配剤という気がする。

小説であるから理屈っぽい説明はできるだけ避けたが、それでも歴史の理解のため、わずらわしい叙述が多かったかもしれない。それにカタカナの人名が多く、これまた読者に忍耐を強いことが多かったのは、作者としてお詫(わ)びしたい。

■傍線の部分、特に、「読者に忍耐を強いことが多かったのは、作者としてお詫(わ)びしたい」、陳さんのこんな言葉、聞いたことがない。前頁にあげた『阿片戦争』『太平天国』『江は流れず』『山河在り』などと比べると、『チングス・ハーンの一族』など、そんなに忍耐を強いというほどのことはない。病気をして、気弱になられたのだろうか。

『江は流れず』
ネットで拾った感想二つ

『江は流れず』は、前頁のような作法で執筆された作品だったわけですが、このことは読者にとってはどうだったのでしょうか。読者の感想をネットから拾ってみました。



中公文庫版表紙

感想一 ■これが小説？学術書みたいでちつとも面白くない。

感想二 ■陳舜臣が描く日清戦争。なかなかこの時代を描く歴史小説がない中で、朝鮮半島の情勢・袁世凱など、中国の動きを克明に描写。また、李鴻章・伊藤博文などの存在感が抜群で、歴史が好きな人には、たまらない本になっている。

まったく正反対の感想ですが、そうなんだろうと思います。読み手の素養・知識欲などなど、地面に水がしみこむのには、地面の状況が大いに関係しているということでしょう。

しかし、一般的に言って、『阿片戦争』『太平天国』『江は流れず』『山河在り』などを読むときには、心準備と根気、上述、陳舜臣さんがおっしゃる、多少の「忍耐」が必要です。

ストーリーへの没入を、詳細多量な時代背景描写によって、度々、断ち切られることになりました。読後感想も、感想二のような読者は少数派でしょう。

陳舜臣作品の魅力と

評価・信頼の源

二つのエッセイから引用します。

小説『阿片戦争』をかいて、もう十年近くになるのに、つぎの『太平天国』に手をつけることができない。一八四〇年から一八五〇年までの十年間は、中国にとっては大変貌の歳月であつたのだ。この十年間をよく見据え、よく理解しなければ、太平天国は一行もかけないであろう。(『中国近代の群像』「それからの林則徐」)

貧窮の土地のどん底の人たちが、世直しに起ちあがつたという先入主が、私の頭にあつたが…。

どん底生活に慣れた人は、世直しを考える意識は低いであろう。貧しいけれども、これまでなんとかやって行けた人たちが、どん底生活に落ちる。——彼らこそ革命の核心となる階層ではあるまいか。私は緑ゆたかな金田村の風景を、営盤から見おろし、太平天国の時代をしのび、そんなことを考えた。(『九点煙記』「金田抄」)

日本語、中国語、英語など、語学力を駆使、幅広い資料に裏付けられた時代背景理解と現地取材を大切にしている陳舜臣さんの面目如実といった文章です。これこそ、陳舜臣作品の魅力、そして評価・信頼の源です。

陳舜臣作品 まずこんな作品から読んでみよう

作品名ほか	備 考	陳舜臣さんを語る会通信 No.	講談社「陳舜臣全集」	集英社「陳舜臣中国ライブラリー」
■推理小説 “陶展文もの”		51、52		
・枯草の根	江戸川乱歩賞	43、51	②①	
・三色の家		51	②①	
・くたびれた縄		52		
・ひきずった縄		52		
・縄の繃帯		52		
・割れる		52		
・虹の舞台		51	②①	
■その他の推理小説				
・玉嶺よふたび	推理作家協会賞	41	①⑨	
・孔雀の道	推理作家協会賞	41	②②	
・青玉獅子香炉	直木賞	19	②③	②⑨
・怒りの菩薩	台湾が舞台	3、48		
・他人の鍵		68	①⑨	
・長安日記	賀望東事件録	53	⑥	
■推理小説短編		89	②③	
■中国歴史もの				
ものがたり史記		56		①⑥
ものがたり唐代伝奇		56		①⑥
ものがたり水滸伝		56	⑦	①⑥
小説十八史略	文庫本なら6巻	62	①②③	⑩⑪⑫
(同上) 傑作短編集	講談社文庫	62	近隣の図書館で所蔵しているかも	
小説マルコ・ポーロ		35	⑧	①⑧
諸葛孔明		26		①⑤
曼陀羅の人	空海入唐を描く	21	⑥	
■日本&中国が舞台				
残糸の曲		15	①⑥	
桃花流水		16	①⑦	⑦
相思青花		44		⑧
夢ざめの坂		45		⑨
■エッセイほか				
・青雲の軸	自伝小説	1		⑨
・道半ば		1		
・神戸ものがたり		69		
・神戸わがふるさと		69		

●陳舜臣作品の電子書籍を所蔵している公立図書館が増えてきております。是非、ご確認を！

●上の画像は『桃源亭へようこそ 中国料理店店主・陶展文の事件簿』（徳間書店2024）の表紙。「くたびれた縄」「崩れた直線」ほか、及び特別収録「幻の百花双瞳」など7作を収録

●上掲QRコードを取り込む→「陳舜臣さんを語る会通信」バックナンバー一覧→左端の数字にタッチ→該当する通信が表示

陳舜臣作品 まずこんな作品から読んでみよう(続)

まずどんな作品から読めば？

陳舜臣さんの著作、「まずどんな作品から読めばいいですか？」

よく聞かれる質問ですが、人それぞれです。

そんなことで作ったのが前頁の一覧表「陳舜臣作品 まずこんな作品から読んでみよう」です。

人気はありますが、あまりに大部な『秘本三國志』は除きました。

この表の中から、興味が持てそうな作品を選んでいただければと思います。

『枯草の根』ほか推理小説

■推理小説『陶展文』もの

『枯草の根』など、素人探偵陶展文が登場する推理小説なら長編、短編、いずれでも、そう負担感なく読めます。

■その他の推理小説

また、前ページの一覧表で、直木賞受賞作『青玉獅子香炉』、推理作家協会賞の『玉嶺よふたたび』と『孔雀の道』も面白いかと…。

中国歴史もの

■中国歴史もの

中国歴史ものでは「ものがたり」三部作、『ものがたり 史記』『ものがたり 唐代伝奇』『ものがたり 水滸伝』が分量的にも、内容的にも

手頃かと。

その他、ミステリー仕立ての短編十話からなり娛樂要素が強い『小説マルコ・ポーロ 中国冒険譚』、空海の入唐求法を描いた『曼陀羅の人』、そして『諸葛孔明』などは読みごたえがあります。

好評の一作『小説十八史略』

講談社文庫版『小説十八史略 一』の巻頭「日を射る者」は次の文章で始まります。

人間。

ただ人間。

ひたすら人間を追求する。

これが古くから中国人の史観であった。

十八史の最初に置かれるのは司馬遷の『史記』ですが、その『史記』からの引用も、各分野に活躍した人物の行いを記した『列伝』からが多い。

人物の行動・事績は、わかりやすく、面白く、また、感情移入しやすい。それに、『小説十八史略』は、前述文庫版六巻全部を読む必要はなく、どの巻のどの章でも、そんなに長いまとまった時間がなくても、読み、楽しめる。

こういうところは、本号のページで取り上げた中国歴史小説の本線四冊、『阿片戦争』ほかとは、まったく違っている。

小説十八史略

『サンデー毎日』

昭和49年9月29日号



右にあげたのは、第一巻、第五章、「事は成らず」の節です。荊軻が匕首をつかんで秦王政に迫る場面です。一節が連載の一回分です。

中日本&中国ほか舞台

■日本&中国が舞台

ここでは、自分とはたして日本人なのか中国人なのか、主人公が自分のアイデンティティーを求める『残糸の曲』、中国人の両親を持つが、日本人家庭で成長した主人公を描く『桃花流水』、三十代半ばの美しい未亡人と五十歳になったばかりの華僑の実業家とのラブ

ロマンス『相思青花(原題 波の残影)』、民族の誇りを失わず、権力におもねらない人間を優しい共感をもって描く『夢さめの坂』の四作を取り上げました。いずれも長編です。『夢さめの坂』で描かれる上海は、まさに「上海ブルース」の世界です。



『波の残影』新潟日報連載75回の挿絵

人間追求が古くから中国人の史観とおっしゃるが…

上述のように陳舜臣さんは、「人間。ただ人間。ひたすら人間を追求する。これが古くから中国人の史観であった」

とおっしゃるが、本号一ページで記述したように、『阿片戦争』ほか、中国歴史小説の本線をなす四作では、主役を立てず、敢えて事件・時代描写を第一義に描いていくという作法をとっている。このあたりを今後、探っていきたい。